



Title	農産物の「辺境貿易」の展開と輸出構造の変化：中国・新疆ウイグル自治区を対象に
Author(s)	康馬, 爾丁; 何, 倫志; 原, 文宏; 伊藤, 亮司; 飯澤, 理一郎; 志賀, 永一
Citation	北海道大学農經論叢, 61, 17-24
Issue Date	2005-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/11271
Type	bulletin (article)
File Information	61_p17-24.pdf



[Instructions for use](#)

農産物の「辺境貿易」の展開と輸出構造の変化

—中国・新疆ウイグル自治区を対象に—

康馬爾丁・何 倫志・原文宏
伊藤亮司・飯澤理一郎・志賀永一

Development of “Remote Region Trading” of Agricultural Products, and Changes in the Export Structure — A case study in Xinjiang Uighur Autonomous Region, China —

Kamaldin, Lunzhi He, Fumihito HARA, Ryoji ITO, Riichiro IIZAWA, Eiichi SHIGA

Summary

The central government of China, in accordance with its Reform and Opening-up Policy, has resumed a restrictive trading system with neighboring countries (Remote region trading) to efficiently promote the development of regional economy. However, the disparity between the trade system's original purpose and the reality has widened along with the significant progress of deregulation.

This paper examines the significance of the restrictive trading system in Xinjiang Uighur Autonomous Region with neighboring countries to the development of regional economy, and the changes in and issues related to the system, by analyzing the development process of the trade system.

1. はじめに—課題の設定

中国の対外貿易は今や「世界の工場」に例えられるほどの規模に達しているが、その大半を占めるのは外資系企業の活躍が目立つ沿岸地域である。一方の辺境地域は投資環境が厳しいことも重なり、国内外からの直接投資は乏しく、沿岸地域との経済格差は益々拡大しつつある。こうした中で、中央政府は辺境地域の経済発展を効率的に促進するため、辺境地域と周辺諸国との間で、一定の限度内で行われる「辺境貿易」(註1)を復活させた。しかし、近年、「辺境貿易」の限度は大幅に緩和され、「辺境貿易」を復活させた目的と現状との乖離が拡大し、その形骸化が進んでいるように思われる。

本稿では中国の西北端に位置する新疆ウイグル自治区(以下、新疆と略)の「辺境貿易」の展開を通してこの問題を検証し、「辺境貿易」が地域経済の発展に果たしている意義などについて吟味

することを課題とする。

2. 「辺境貿易」の元来の定義とその実態的変質

現在、中国で「辺境貿易」が行われている地域は、辺境地域に位置する9省・自治区(註2)である。これら地域の大半は社会的・歴史的に沿岸地域と大きく異なる少数民族地域であり、かつ後進地域である。また、旧来より周辺諸国との宗教や言語、生活風習、価値観などの共通性を土台に経済的な交流、「辺境貿易」を行い、地域経済の振興を図ってきた地域である。

新中国の設立に際して、新政府は周辺諸国との私的・公的な「辺境貿易」の継承を奨励した。

「辺境貿易」の特徴は次の三点に要約される(註3)。一つは、それは性格的に見れば「国際貿易」であるが、そこでは国際市場一般の価格形成メカニズムはほとんど働かず、もっぱら双方の合意によって価格が形成されるため、双方の利益が

最大限尊重されることである。二つは、取引品目のほとんどは地域性、伝統性、民族性に根ざした多種多様な当該地域産もので、地域の経済的發展と大きく関係していることである。三つは、それぞれの取引単位は小規模で、それぞれの必要に応じて取引し出来ることである。こうした特徴を持つ「辺境貿易」は中国、特に辺境地域の「対外貿易」を効果的に推進するばかりではなく、辺境地域の経済發展、また社会的安定に大きく寄与するものと言えよう。これらの点に関連して、1959年の中国・新疆とソ連との「辺境貿易」再開に関する中ソ会談の席上、ソ連代表が「辺境貿易」に関して「現在中ソ間の辺境地方性貿易は、中ソ二カ国の辺境貿易に関する契約内容を超える範囲にまで發展してきた。例えば、中国側が輸入するトラクターはボルガ地区から運び出され、中国が輸出する織物は上海産であったりすれば地方辺境貿易の性質が失われるため、取引品目は地域特産に限るべきである。また、貿易額の上限を設定し、必要に応じて変動幅を決定すればよい」(註4)と貿易品目を可能な限り辺境地域産物に限定し、また、貿易額も相応な範囲に限定すべきことに言及している点を付記しておきたい。

しかし、近年の中国経済の急成長や辺境諸国の国情変化の中で、「辺境貿易」は大きく姿を変えつつある。現在、中国では以下の3つの姿をとる貿易を「辺境貿易」と規定している。その一つは、国境線の20km範囲内の国が定めた特定の「開放点」、あるいは指定の自由市場で、規定された金額(1000元/1日/人)及び数量の商品交換活動を行うもので、「辺境民相互貿易」と呼ばれるものである。二つは、「辺境貿易」経営権を取得した辺境開放地域の企業が、国の指定した「特定口岸」(港)において、周辺諸国の辺境地域の企業或いは貿易機構と規定された品目(註5)に限定して取引しを行うもので、「辺境小額貿易」と呼ばれているものである。三つは、「辺境地域対外貿易経済合作部門」の認定あるいは「対外経済技術合作経営権許可」を受けた企業が周辺諸国辺境地域で行う請負事業などであり、「辺境地区対外経済技術合作」といわれるものである。

とはいえ、これらはあくまでも国が規定しているものであり、それらの範囲を超えて「辺境貿

易」は拡大しているのが現実である。例えば、新疆では、上記以外に、国内外旅行者が入疆時に所持していた外貨・小切手(税関登録の必要あり)で商品を購入し、それを域外・周辺諸国に持ち出す、いわゆる「旅行者ショッピング貿易」などが日常的に見られる。こうして、「辺境貿易」は今日、様々に拡大解釈あるいは実践され、先に指摘した三つの特徴を次第に失い、価格メカニズムの支配する「一般貿易」化しつつあるのである。以下、「辺境貿易」の如上のような変容が著しい新疆を事例に、そのことを検討していくことにしよう。

3. 新疆における対外貿易の展開と「辺境貿易」

新疆は、中国の西北端に位置する中国最大の少数民族地域である。総面積は全国の6分の1に相当し、中国56民族のうち47民族がここに集中している。外モンゴル、ロシア、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、パキスタン、アフガニスタン、インドの8つの国と国境を接し、国境線の長さは5700kmに達する。また、古代シルクロード時代には東西交流の要衝として栄え、当初から中国の対西欧諸国への進出の拠点として重要な役割を果たしてきた。しかし、海路の発見とその急速な發展に伴い新疆の戦略的地位は徐々に低下し、經濟發展から取り残されてきた。そこからの転機となったのは、まず新中国の誕生による經濟開發であり、次いで近年の対外開放政策、そして現在進められている「西部大開發」であり、新疆の戦略的な地位は再び重要視され、「辺境貿易」も急速に拡大している。

新疆の対外貿易は古代シルクロード時代に遡るが、主権国家の一地域として周辺諸国との対等平等な対外貿易を展開するのは新中国の成立した1949年以降である。今日、世界中の多くの国々(100国以上)と貿易関係を結び、取引品目及び貿易総額は年々拡大傾向にある。中でも国境を接する周辺諸国との比重は大きく、しかもその大半は「辺境貿易」によるものである。例えば、若干数値は古いだが、1999年の実績で見れば、貿易総額の67.6%を占める11.9億ドル相当が国境線を接する8つの周辺諸国によって占められ、そのうち85.8%は「辺境貿易」によるものであった(註6)。

表1 新疆における対外貿易と「辺境貿易」の動向

(万ドル, %)

年次	対外貿易					対外貿易に占める「辺境貿易」の比重							
	画期	総額	輸出	輸入	純輸出	画期	総額	輸出	輸入				
1949～56	旧ソ連	22956	11775	11181	594	記帳貿易期	100	100	100				
1957～62	中心期	31463	21225	10238	10987	中 断 期	0.0	0.0	0.0				
1963～80	方向転換期	19226	10792	8434	2358								
1981～85	全方位 開放期	132225	89462	42763	46699					バーター 貿易期	0.3	0.1	0.6
86		28412	20535	7877	12658								
87		31535	22291	9244	13047								
88		40775	29887	10888	18999								
89		48426	35881	12545	23336								
90		41025	33530	7495	26035								
91		45933	36317	9616	26701								
92		75039	45386	29653	15733	バーター 及び現金 貿易期	20.5	13.8	45.9				
93		92210	49509	42701	6808								
94		104053	57612	46441	11171								
95		142798	76880	65918	10962	取引形態 多様化期	52.1	21.8	99.1				
96	140400	54975	85392	-30417									
97	144700	66547	78120	-11573									
98	153200	80789	72425	8364									
99	176500	102743	73791	28952									
2000	226000	106000	120408	-14408	58.4	54.7	61.6						

注：1949～56年，57～62年，63～80年，81～85年はそれぞれの期間における累積金額である。

資料：新疆統計局編『新疆ウイグル自治区商業・外経歴史資料』及び『新疆統計年鑑』より作成

表1に示したように、1949年以降の新疆の対外貿易の展開過程は3つの段階に分けることができるが、「辺境貿易」は国内政策と国際情勢の影響を受け易いこともあって大きな変容を余儀なくされてきた。

まず第一期は1949～62年頃までで、対外貿易がソ連中心に展開された時期である。この時期の「辺境貿易」は、1956年の「社会主義的改造」によって180度とって良いほどの変容を余儀なくされる。すなわち、1955年まで、新疆が平和的に解放され新中国の省として成立したこともあって、それまでの国民党管轄の「元新疆貿易公司」「西北民生実業公司」及び三区革命政権（註7）管轄の「イリ発展公司」が国営「新疆省貿易公司」に再編・統合されたとはいえ、対外貿易の計画・立案・実行権限は従来通り新疆省に委ねられ、事実上「辺境貿易」として機能していた（1955年に新疆ウイグル自治区が成立し国営「新疆省貿易公司」が「新疆ウイグル自治区対外貿易局」に再編されたが、権限には変更がなかった）。しかし、1956年に始まった「社会主義的改造」の中で、

全ての対外貿易局や私営の対外貿易公司是社会主義体制の中に組み込まれ、中央政府の統一管理下に置かれることになったのである。こうした中で「辺境貿易」は事実上消滅し、一般貿易の中に吸収されることになるのである。

第二期は1963～80年頃までで、中ソ関係の悪化の中で、貿易額が激減していく時期である。1960年以降、中ソ関係は悪化の一途を辿り、各地の貿易口岸（港）は次々に閉鎖され、新疆の対ソ連貿易額は激減していくことになる。旧来の貿易口岸（港）に代わって上海、天津など沿岸部諸港が貿易港として浮上してくるが、遠隔地の新疆にとって、それは経済的不利性を倍化するものであり、貿易額の激減を余儀なくされていくのである。他方、「辺境貿易」は、中国とインドとの敵対関係を背景に、パキスタンとの友好関係の構築・強化のために、1969年、パキスタンとの「辺境貿易」が開始されるが、新疆はこの時期、農産物の生産は低迷し、しかも「辺境貿易」自体が色濃く中国による経済援助としての性格を持っていたため、ほとんど見るべき成果がなかったとって良い。

第三期は1981年以降現在までで、中国が「改革・開放」政策へと転換した時期、すなわち「全方位開放期」である。周知のように中国はこの時期、「改革・開放」政策を強力に推し進め、「市場経済」へと転換し、また WTO にも正式加盟し、経済の国際化を図ってきた。早くも1983年には20年ぶりにソ連との貿易が再開され、閉鎖されていた陸路貿易ルートが開放され、さらに鉄道、空路の貿易ルートが新たに建設された。この措置に伴い新疆の対外貿易は全面的に開放され、特に「市場経済」が導入された1992年以来、その規模は急速に拡大しつつある。

こうした中で、「辺境貿易」もまた拡大していったことはいうまでもない。新疆の「辺境貿易」は提出した方針が1986年1月、中央政府によって批准されたことにより、「新疆地方貿易輸入出公司」を運営主体として再開された。再開以降、1990年までは双方の契約に基づくバーター取引の形態を取り、最終的決済通貨はルーブルではなくスイスフランが選択された。その後、1991年のソ連の解体と中央アジア諸国独立もあり、バーター取引と現金取引が併存する形になり、決済通貨もルーブルとアメリカドルに変わった。ま

た、1996年以降、「辺境貿易」の範囲が一層拡大されるとともに取引形態は多様化し、決済通貨は周辺諸国通貨や中国人民元、アメリカドルなど、幅広い通貨が使用されるようになってきている（公式統計では中国人民元とアメリカドルに換算されている）。

1992年以降、中央政府が「辺境貿易」に対する一連の優遇政策を相次いで決定したこともあり、新疆の「辺境貿易」は前掲表1に見られるように一層の拡大を遂げ、2000年には全対外貿易額の58.4%、13.2億ドルにも達しているのである。この額は「辺境貿易」行っている8省・自治区の中で内モンゴルの14.5億ドルに次いで多く、全国「辺境貿易」総額の4分1以上に相当している。

4. 「辺境貿易」における輸出構造の変化と農産物の地位低下

先に触れたように、「辺境貿易」での取引品目は元来、地域性、伝統性、民族性に根ざす当該地域産のものである。新疆は農業を基幹産業とする地域であり、膨大な穀物、油料作物、綿花、甜菜などの畑作物、牛、羊などの畜産物、そして葡萄に代表される果樹・園芸作物を産する。中で

表2 新疆の主要農畜産物の全国的シェア (2002年) (万人, 万トン, 万頭, %)

	人口	穀物	油料	棉花	甜菜	水果	葡萄	大型畜	羊・ヤギ	食肉	羊毛
全国	128453	39798.7	2897.2	491.6	1282	6952	447.9	15189.3	31655.2	6586.53	30.8
新疆	1905	797.8	44.4	147.7	466.8	198.2	90.8	654.4	3908.2	100.2	7.4
比重	1.5	2.0	1.5	30.0	36.4	2.9	20.3	4.3	12.3	1.5	24.0

注：油料とは油料作物，大型畜は大型家畜の略であり，水果は日本でいう果実である
資料：<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/yearbook2003.cpdf> より作成

表3 1949-56年における新疆「辺境貿易」の推移 (万ドル, %)

	輸出額 (A)	畜産物 割合	食糧・油料 割合	その他 割合	輸入額 (B)	生産資料 割合	生活資料 割合	純輸出額 (A-B)
1949	900				900			0
50	637	35.6	64.4	0.0	713	48.0	52.0	-76
51	1111	61.6	38.4	0.0	822	85.0	15.0	289
52	1431	91.1	8.0	0.9	889	86.1	13.9	542
53	1048	76.1	19.8	4.1	835	96.0	4.0	213
54	1052	71.2	26.5	2.3	1121	93.0	7.0	-69
55	1965	46.7	20.9	32.4	3093	96.9	3.1	-1128
56	3631	30.5	30.3	39.2	2808	97.0	3.0	823

注：畜産物は牛，馬，羊など家畜で，その他は棉花や布類である。
資料：『新疆対ソ連（ロシア）貿易史』、『新疆ウイグル自治区商業・外経歴史資料』より作成。

表4 1957～85年の農産物の移入出量

		移出	移入
穀物	万トン	80.4	55.0
棉花	万トン	83.6	0.0
牛	万頭	76.6	
羊	万頭	29.2	
役畜	万頭	30.9	
牛肉	万トン	2.8	
羊肉	万トン	4.4	
豚肉	万トン	0.0	19.9
羊毛	万トン	3.4	
羊皮	万枚	789.9	
牛皮	万枚	10.4	

資料：『新疆資源経済データ対比分析』より作成。

表5 1986～95年の「辺境貿易」の輸出品目

品目		輸出量
食糧・油料	(万トン)	20.5
干しぶどう	(万トン)	18.5
ハミ瓜	(万トン)	85.6
ナシ	(万トン)	66.6
トマトケチャップ	(万トン)	82.1
にんにく	(万トン)	38.3
ベニバナ	(万トン)	3.8
羊毛	(万トン)	1.4
ラクダ毛	(万トン)	0.4
カシミア	(万トン)	0.9
ヤギ皮	(万枚)	20.7
羊皮	(万枚)	12.9

資料：『中国農業全書-新疆巻』及び『新疆統計年鑑』より作成。

も、2002年で見れば、甜菜は全国の36.4%、綿花は30.0%、羊毛は24.0%、葡萄は20.3%、羊・ヤギは12.3%を産し、また、牛などの大型家畜、葡萄、穀物のシェアも新疆の人口シェアを上回っている(表2参照)。

こうした中で、これら農産物が新疆の「辺境貿易」の主要輸出品目を成していたことはいうまでもない。表3は1949～56年の、表4は1957～85年の、そして表5は1986～95年の「辺境貿易」及び中国他地域との移出入における輸出・移出品目を示したものである。まず、1949年～56年を見れば、1955、56年にその他割合が30%を超すがそのほとんどは綿花であり、若干の布類が含まれているとはいえ、それとて綿花、羊毛、繭糸を原料と

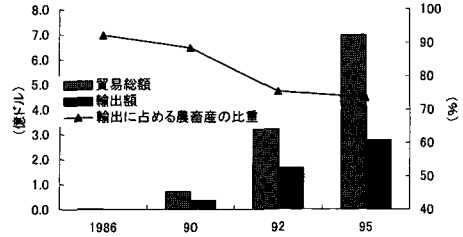


図1 新疆「辺境貿易」の推移と輸出額に占める農畜産物の割合

資料：『中国農業全書-新疆巻』、『新疆統計年鑑』より作成

したものであり、基本的に農産物といつて良い。また、年によりバラツキがあるとはいえ、一方的な出超あるいは入超とはなっておらず、同期間に輸出11,775万ドル、輸入11,181万ドルとほぼバランスが取れている点は注目されても良い。さらに、『新疆対ソ連(ロシア)貿易史』によれば、1952年の取引価格(トン当たり)は牛660.4ルーブル、羊746.6ルーブル、綿花3937.1ルーブル、小麦297.3ルーブル、食肉1948.3ルーブル、バター3048.7ルーブルなどとされており、概ね生活実感に基づく「正当な価格水準」となっており、双方合意に基づいて価格形成がなされていたと判断できる。他方、輸入品目は、内容不明の1949年及び「生活資料」割合52.0%の1950年を除けば、「生産資料」(機械類や化学肥料など)割合が80%以上を占めている。そこには、当時の新疆の工業化の遅れが反映されているといえよう。

先に触れたように、1957～85年、新疆の「辺境貿易」は事実上の停止状態が続くが、代わって浮上してきたのは中国他地域との交易=移出入関係である。表4に見られるように、この期間、「辺境貿易」に廻っていた農産物の多くは移出に転換している。豚肉の入超を除けば、いずれの品目も大幅な出超となっており、新疆は中国の一大農産物供給地帯を形成していたのである。しかし、この移出は自主的なものというわけにはいかず、厳格な国家統制の下で、中央政府の命令に従ったものだったのである。

「辺境貿易」は1986年に再開され、1992年の優遇政策によって、取引品目と貿易総額は急速に拡大する。表5によれば、1986～95年でハミ瓜の85.6万トン筆頭に、トマトケチャップの82.1万

表6 新疆一般貿易・輸出額 占める原料品輸出額等の推移 (億ドル, %)

年次	一般貿易					辺境貿易	
	総額	輸出額	工業製品	原料品	原料品割合	総額	輸出額
1996	14.04	5.50	3.86	1.64	29.82	7.31	1.86
97	14.47	6.65	4.80	1.85	27.82	7.49	2.29
98	15.32	8.08	6.31	1.77	21.91	8.69	3.25
99	17.65	10.27	7.97	2.30	22.40	10.23	5.73
00	22.60	10.60	7.00	3.60	33.96	13.19	5.80
01	17.69	6.68	4.47	2.21	33.08	9.80	2.14
02	26.92	13.09	9.07	4.02	30.71	15.43	4.72
03	47.72	25.42	21.85	3.57	14.04	30.39	16.04

資料：『新疆統計年鑑』各年版より作成。

表7 近年における新疆辺境貿易」の主な輸出品目 (万ドル)

年次	ロシア		カザフスタン		キルギスタン	
	輸出額	主な品目	輸出額	主な品目	輸出額	主な品目
1999	700	靴, 機械, 米, 砂糖	49600	衣類, 靴, 玩具, 繊維, シルク	9100	衣類, 靴, 玩具, シルク, ナイロン布
2000	1300	衣類, 靴, 玩具, 珪素, 果実	5700	衣類, 靴, 玩具, 化学繊維	10400	合成繊維布, シルク, 衣類, 靴, 米
2001	3300	衣類, 靴	20900	コークス, 衣類, 靴, 白黒テレビ	5700	合成繊維布, 衣類, 靴, 塩化カルシウム
2002	4700	衣類, 靴, 機械部品	44200	衣類, 靴, プラスチック製品, テレビ	9900	靴, 人工繊維, プラスチック製品, 衣類, 米
年次	タジキスタン		パキスタン		モンゴル共和国	
	輸出額	主な品目	輸出額	主な品目	輸出額	主な品目
1999	200	合成繊維, シルク	550		440	小麦, アルコール, 油料
2000	100	ガソリン, 石油製品	1900	衣類, 靴, 機械, 時計	380	小麦, 酒, 油料
2001	350	衣類, 食器, 個体塩化カルシウム	590	鉄鋼, 食器, 潜水ポンプ	550	小麦, 酒, 油料
2002	20	米	6660	衣類, 靴, 人工繊維布, 機械部品, 時計	310	油料

資料：http://www.stats.gov.cn/tjgb/ndtjgb/dfndtjgb/t20020331_15673.htm より作成。

トン, ナシの66.6万トン, にんにくの38.3万トン, ヤギ皮の20.7万トン, 食糧・油料作物の20.5万トン, 干し葡萄の18.5万トンなどが輸出されている。しかし, 図1に示したように輸出に占める農産物の割合は傾向的に低下し, 1995年には70%余となっているのである。これには1985年以降, 新疆では綿花生産重視の農業政策が採られ, 1994年には「全国最大級優良綿花生産地」に指定されたことが大きく関与していよう。綿花生産の増大の中で他作物の生産は縮小し, 次第に輸出余力を失い, また, 綿花は「国家管理対象品目」となっているために, いくら増産し, 域外に搬出しても「辺境貿易」にはカウントされなかったのである。また, この期, 遊牧民の定住化政策が展開され, 牧畜業の停滞・後退があったことも, 農産物比率の低下には影響しているといえる。

1996年以降, 統計上, 農産物とそれ以外の区分

がなされていないために, 「辺境貿易」に占める農産物の割合を明確に示すことはできない。ここでは止むを得ず, それを, 一つに近年の一般貿易の輸出額に占める原料品(中国でいう「初級産品」, この中に農産物が含まれている)の割合の推移, 二つに新疆の「辺境貿易」の主要な相手国への主な輸出品目の変遷を検討することによりつつ傍証することにしよう。

表6は前者を, 表7は後者を示したものであるが, まず表6から見ていくと, 新疆の一般貿易に占める原料品割合は2000-01年に33%台となるのを除けば, 1996年の29.8%から2003年の14.0%へ, 概ね低下傾向で推移していると見てもよい。原料品の中には, 「辺境貿易」にはカウントされることのない綿花が含まれていることからすれば, 「辺境貿易」における農産物の地位は一層低下していると推察されるのである。代わって伸びてい

ると考えられるのは工業製品である。表7によれば、「辺境貿易」の主要輸出品に農産物が登場するのは、毎年小麦や油料が登場する対モンゴルを除けば、1999-2000年の対ロシア（米・砂糖・果実）、99年の対カザフスタン（シルク）、99-00年及び02年の対キルギスタン（シルク・米）、99年と02年の対タジキスタン（シルク・米）だけであり、しかもその順位も決して高いものとは言えない。圧倒的多数は衣類・靴・玩具・テレビ・石油製品などの工業製品によって占められているのである。とはいえ、それら衣類や雑貨品、テレビなどの多くは、新疆の産業構成からして新疆産のものではなく、沿岸地域からの移入品と考えられるのである。

こうして、地域性、伝統性、民族性に根ざす当該地域産ものの交易という「辺境貿易」の形骸化が、「旅行者ショッピング貿易」の隆盛とも相まって、大きく進行しているのである。

5. おわりに

以上、検討してきたように、自然条件や立地条件に恵まれない辺境地域が周辺諸国辺境地域との共通性・類似性を最大限に生かし、双方の経済発展及び自立促進に資することを目的として開始された「辺境貿易」は、今日、大きく変質してきつつあるといえる。その変質の要因の一つとして、ユーラシア新鉄道の開通・運営と「西部大開発」を契機に、生産過剰に陥りつつある沿岸地域の産物を西へ西へ流そうとする、いわゆる「東進西出」政策が大きく関与しているといえる。それらの産物が国境を越え、「辺境貿易」の衣をまとうて周辺諸国になだれ込みつつある。それがさらに進めば、市場メカニズムの作動する一般貿易に転化してしまう可能性も高いと考えられるのである。

新疆は国内有数の農業地域であり、開発の潜在的可能性も極めて高い。しかし、その立地条件は辺境性が強く、農業適地あるいは居住適地は一部のオアシス地域に限られ、広域分散的とならざるをえない。ために、農産物の販売条件は厳しく、域内市場は小規模分散的であり、また、国内他地域とは相当な遠距離にあり、高コスト、特に高輸送コストにならざるをえない。例えば、最も近い黄河上流経済圏の中心都市・蘭州市までの平均距

離は1700kmもあり、中央経済圏の北京までの距離は3800km、購買力の高い沿岸地域経済圏までの距離は4000kmを超える。こうした距離は、鮮度の要求される農産物にとって、一種の致命傷ともいえよう。

こうした中で、周辺諸国に比べて農業生産力水準が高く、大きな潜在的可能性を秘めている新疆にとって農産物の「辺境貿易」は極めて重要な意味合いを持っているのである。農産物を主軸にした「辺境貿易」の発展を図るために、今後、素材としての農産物だけではなく、加工品の開発に努め、さらにブランド化を目指すなど、総合的な輸出戦略の樹立が必要とされているのではないだろうか。それが、ひとり「辺境貿易」の発展だけではなく、新疆農村経済の発展、新疆経済の発展に繋がっていくだろうことは疑いない。

（註1）現在の「辺境貿易」には「辺境小額貿易」、「辺境民相互貿易」、「辺境地区対外経済技術合作」の三つが含まれているが、ここで対象とするのは「辺境小額貿易」である。

（註2）遼寧省、吉林省、黒龍江省、内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区、チベット自治区、雲南省、広西自治区などである。

（註3）参考文献3）、pp.7.

（註4）参考文献1）、pp.628. 1959年に新疆とソ連の「辺境貿易」は再開されるが、翌年の60年に再び中止される。

（註5）取引品目の中、米、トウモロコシ、石炭、原油、精製油、タングステン、アンチモン、亜鉛、スズ、材料、蚕糸類の11品目は国家重点管理の品目で、輸出する際に国の許可が必要である。

（註6）参考文献5）より算出。

（註7）三区革命政権の三区とは、1944年にイリから始まった反国民政府運動で、同年イリ地区において政権を確立し、その後アルタイ・タルバガタイの二地区を支配したことから「三区」と呼ばれた。

参考文献

- [1] 厉声著『新疆対ソ連（ロシア）貿易史』新疆人民出版社、1993年、p615.
- [2] 新疆ウイグル自治区国土整治農業区画局編『新疆資源経済データの対比分析』中国計画出版社、1990年、p293.
- [3] 那日著『中国周辺市場』中央民族大学出版社、2000年.

- [4] 中国農業全書総編集委員会編『中国農業全書—新疆卷一』中国農業出版社, 2000年.
- [5] 新疆統計局編『新疆統計年鑑』中国統計出版社, 各年版.
- [6] 新疆統計局編『新疆ウイグル自治区商業・外経歴史資料』資料, 1988年.